

04年カツオ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量										加工品		
	漁獲	産地		輸入	輸出		消費地	消費支出	在庫	缶	削	節	生利
		生	冷		生	冷	缶	生	生(万円)				
15	322	89.7	198.9	71.9	74.0	0.1	34.1	1,411	29.4	20.8	36.0	3.9	
16	286	58.9	207.5	81.2	13.4	0.3	26.9	1,282	32.6	20.9	38.3	3.8	
%	89	66	104	113	18	305	79	91	111	####	100	106	97

年	価 格						
	産地	消費地	輸入	輸出	消費支出	消費支出	
	生	冷	生	生	冷	生(円)	鯉節
15	205	115	414	79	77.7	2,178	
16	316	104	539	86	84.7	2,024	980
%	154	90	130	109	109	93	

漁業・資源・漁獲

日本のカツオ漁業は、千葉以南の沿岸や伊豆諸島周辺で行われている曳縄を別にすると大別し一本釣りときまき網に分けることができる。また、カツオの漁獲量の大半がこの2つの漁種により占められている。

昭和39(1964)年南方竿釣り漁業が周年操業化、同45(1970)年の開発センターの調査を境にして同49(1974)年に海巻き操業の本格化がみられ、漁場は南及び東方にも拡大し、10°S以北、155°W以西の中央～西部太平洋で広範囲に形成されている。更にインド洋(現在は撤退している船も多い)、タスマニア、ニュージー海域での操業もみられるようになり、その比較的豊富な資源量と品質的安定も加わり、特に海巻物は節業界にとっては輸入物と同様、貴重な加工原料となっている。

1970年代以降増加を続けていた中西部太平洋の漁獲量は、1988年に50万トンを越え1990年代に入り、100万トン前後の漁獲で横ばい傾向であったが、1998年以降更に高水準とされ、CPUに明瞭な減少傾向がみられないことや、標識放流データを用いたモデル計算でも開発の余地があること、などが報告されており安定した資源状態を維持しているといわれる。インド洋の資源も、1983年の6万トンから1994年の31万トンへと急激に増加し、その後の漁獲量も25万トン前後とやや減少したが、1998年に再度31万トンと再度増加しつつある近年、漁獲の約半分を巻網(フランス、スペイン、日本)、残りを(モルジブの竿釣りとスリランカの流し網)でとっているが、概ね健全であるとの評価がなされている。

ただ、従来みられなかった小型魚が卵を持っていたり、網の入る深度が深くなったりと、多少資源の変化を表す兆候が見られている。

現在操業が行われている南方漁場での海巻の勢力は、中西部太平洋で主に日本、台湾、米国、韓国、フィリピン、スペイン、ミクロネシア、キリバス、バヌアツ(便宜置籍船)、マーシャル(便宜置籍船)、その他、東部太平洋ではメキシコ、エクアドル、ベネズエラ、米国、コロンビア、スペイン、パナマ(便宜置籍船)、バヌアツ(便宜置籍船)、その他、東部大西洋ではスペイン、フランス、ベネズエラ、インド洋ではスペイン、フランス、セーシェル等のまき網や、竿釣り、流し網が操業を行っている。

しかし世界的な魚価低迷の中、漁獲努力の調整がいわれており、一昨年3月に世界カツオ・マグロまき網機構(WTPO)が設立されている。

また、国内供給問題では、従来の生食用のB1カツオに加えて、10年以上前から海巻B1(P S)

製品の生産もみられ、末端の特売用商材として既に定着化している。

本年のカツオの漁獲量は、28.6万トンであった。

産地水揚量と価格

16年の産地水揚量は、26.6万トンで前年28.9万トンを上回った。

内訳は、生5.9万トン、冷20.8万トン（前年：生9.0万トン、冷19.9万トン）であった。

本年の生鮮（日本近海）の漁況は、初漁期（1～4月：犬吠埼以南の本邦南岸域漁場）の釣り漁場は特大～大型魚主体であったが前年を下回るやや低調な水揚げが続いた。

その後、黒潮前線を越えてからの本格化する三陸・常磐沖での漁は、竿釣り、まき網とも低調に推移し、特にピークの7月に低調で何れも前年を下回る水揚げにとどまった。秋以降の「下りカツオ」・「戻りカツオ」の時期では9月にやや好調だったのみで、目立った漁獲に繋がらなかった。

海域別漁獲量は、三陸52%（前年：63%）、常磐28%（前年：23%）、南西・東海2%（前年：3%）、九州西部10%（前年：4%）九州南部8%（前年：7%）であった。

本年も漁場形成の主体は三陸・常磐海域であったが、初漁期からやや好漁で九州地区でのシェアが伸びている。

南方竿釣りのカツオ（東沖を含む）焼津						海外まき網の状況（全国）					
年次	単位		15年	16年	前年比(%)	年次	単位		15年	16年	前年比(%)
水揚隻数	隻	延	258	256	99	水揚隻数	隻	延	286	311	109
水揚量	トン	計	72,157	66,092	92	水揚量	トン		185,659	191,234	103
々	々	カツオ	44,128	47,445	108	1隻当たり	々		649	615	95
々	々	キハダ他	28,028	18,647	67	水揚金額	100		17,837	20,526	115
1隻当たり	々	計	280	224	80	1隻当たり	万円		62	66	106
水揚金額	100	計	15,247	11,632	76	価格	円/kg		96	107	111
1隻当たり	万円	計	59	45	77	水揚量	トン		149,659	151,915	102
価格	円/kg	平均	211	176	83	1隻当たり	々	カツオ	523	488	93
々	々	カツオ	151	157	104	価格	円/kg		82	98	120
々	々	キハダ他	306	224	73	水揚量	トン		30,911	30,516	99
						1隻当たり	々	キハダ	108	98	91
						価格	円/kg		161	161	100
						水揚量	トン	メバチ	4,542	4,678	103
						々	々	その他	547	4,125	754

冷凍カツオは、竿釣り（焼津）は南方が前年(3万2千トン)を上回る4万2千トン、東沖が前年の約半分の7.7千トンと大幅に水揚げが減少した。一方、本年の海巻きは、カツオ、メバチ（ダルマ）がやや増加、キハダ（キメジ）が昨年並みであった。

竿釣りピン長は回転すし等を始めとした外食産業・居酒屋等での需要増加もあってマーケットを獲得している。本年は、東沖トンボ漁は全くの不発状態でほぼ漁獲皆無であり、上半期の伊豆列島周辺漁場での漁獲に止まった。なお本年の釣トンボの水揚げは生鮮15,623トン(前年6,421トン)冷凍16,955トン(前年28,644トン)であった。

価格は、生316円（前年205円）、冷104円（前年115円）で推移したが、生は水揚げ減少を反映し上昇し、冷は水揚げ増加もあり引続き下落した。

消費地入荷量と価格

16年の消費地入荷量（10大都市）は、生2.7万トンで前年（生3.4万トン）をかなり下回った。本年は春から初夏にかけて、「初カツオ」のシーズンに特大～大型魚の水揚げが好調で、潤沢に入荷したことを反映した結果である。

カツオはサンマと並んで、大衆魚の中では現在でも比較的旬がみられる代表的な魚でもある。しかし、近年B1製品の普及・定着で市場外流通主体の「タタキ」や東沖「トロカツオ」等の定着で周年商材として定着している。

しかし本年は、秋以降の三陸の「下りカツオや戻りカツオ」の時期に大幅に漁獲が減ったため相場が高め基調で、家計調査によると秋口の消費が例年に比べて落ちた。

価格は、539円で産地水揚げの不振を反映し、前年の414円をかなり上回った。

輸出入

カツオの輸出は、原魚と缶詰に分かれるが、缶詰輸出は既に国際競争力はなく、生産＝輸出も僅かになっている。

本年は、原魚7.4万トン（前年3.0万トン）、缶詰350トン（前年88トン）と近年では大幅に輸出が増え、原魚輸出は好漁を反映し、今年もタイ（6.5万トン）向けに9割近いシェアであった。

輸入は平成年度に入ってから円高傾向もあって年々増加傾向がみられていた。これは節用需要の高まり（竿釣船のB1化に伴い国内の需要を満たしきれなくなった）で量、価格、品質とも安定している輸入物への依存度が高まっているためである。しかし本年は国内原魚が早い時期からまとまったため安値であったが、輸入物に対する堅調な需要もあるため、輸入量は7.2万トンで前年（7.4万トン）並みであった。

価格は、79円で前年（89円）を下回った。